

マラソンの松

附属小学校の中庭の一隅に、日本の松に似た見なれぬ樹が芽ばえて、この寒さにもめげず、地面にうずくまるようなかっこうで、直径四十センチばかりの青々とした茂みをつくっている。この樹には、不思議な因縁話があるのである。

マラソンの松

紀元前四百九十年、ペルシャの大軍が、アテネの東北四十キロのマラソン（マラトン）の野に上陸作戦を行なったとき、アテネはミルティアアデス將軍の奇襲作戦によって大勝を博した。その勝報を伝えるため、伝令フェイディピデスはアテネの城門まで走りつき、むらがる市民に「わが軍勝てり」と告げるやいなや卒倒、絶命した。この勇壮な物語によってマラソン競走がはじまったことは、人の知るところ。じつは、そのマラソンの野に茂る松の実の一粒が、わが校庭の土に

根をおろしたのである。

昭和三十八年八月、ボーイスカウト世界ジャンボリーがマラソンの野で開かれたとき、世界各地から三万の若者が集まったそうであるが、日本からは百三十名が参加した。そのとき、指導部の一員として付き添っていた原北陽氏が、その海岸の松の根方でひろったという実を持ち帰った。原さんのみやげとしていただいた幾粒かのなかの一粒だけが、まさに発芽したというわけである。

この、天与とでもいい「マラソンの松」を、これから大事に育てていくことにしたい。そのことを過日も朝会するとき、子どもたちに呼びかけたことである。

(昭和四十二年二月)